レセプションで，SEP 大学院生と AOTULE 短期交換学生が談笑。（右から，SEP，Rashidi さん：機械制御システム専攻，機械宇宙システム専攻所属の TA の黄さん，台湾国立大学の Li さんと Fu さん）

関連ウェブページ

「国際連携を核とした先導的技術者の育成」
大学院教育改革支援プログラム
http://www.eng.titech.ac.jp/igse/index.html

「持続可能な発展のための国際高等技術者育成特別プログラム」
http://www.eng.titech.ac.jp/ingp/sep

「アジア・オセアニア工学系トップ大学リーグ（AOTULE）」
http://www.aotule.eng.titech.ac.jp/index.htm

（　*教育改革プログラム支援　特任教授，
**理工学研究科化学工学専攻　准教授，
***理工学研究科電気電子工学専攻　准教授）

JAYSES 2008

日本アジア理工系学生交流プログラム2008

ー多様性の理解から国境を越えた友情へー

紫村　次宏

２年目を迎える国際室が支援する学生交流短期プログラム「JAYSES（Japan-Asia Young Scientist and Engineer Study Visit）：日本アジア理工系学生交流プログラム」は，今年は日本インドネシア友好年（国交50周年記念）記念事業として外務省より認定され，８月24日から９月６日の約週間，東工大生17名（留学生２名を含む）をタイおよびインドネシアに派遣し，10月15日に帰国報告会・終了式を実施しました。

出発に先立ち学生たちは事前研修として，訪問予定先を分担して調べ英語によるプレゼン発表・討論の演習を行い，特別講義として大学院理工学研究科長・工学系長である岡崎健教授およびフィリピン拠点長新山浩雄特命教授から地球環境問題に関するレクチャーを受けました。また，留学生ボランティアによるタイ語・インドネシア語の基礎を学んだり，両国政府観光局から講師を招き訪問地の基礎情報を学び，安全対策講習も受講しました。

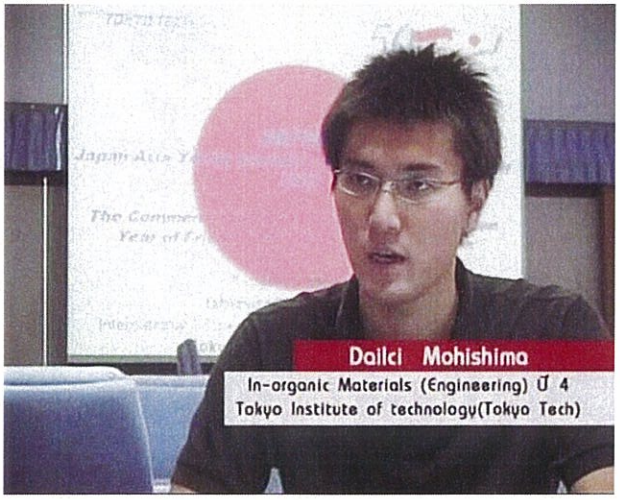
今回初の試みとしては，昨年訪問したタイに加えインドネシアの２カ国３都市（バンコク，バンドン，ジャカルタ）を訪問し，両国の比較研究を狙った事，さらに東工大生のみならずタイのカセサート大学の学生４名，インドネシアのバンドン工科大学とガジャマダ大学の学生６名も行動をともにし，外国渡航を行ったことがあげられます。さらに各地で現地参

JICA インドネシア市民警察活動促進プロジェクト

加の学生たちもジョインし政府機関，大学，研究施設，JICA プロジェクト，日系企業等さまざまな機関を訪問し，バンコク，バンドン，ジャカルタで Student Forum を３度開催し，全参加大学６校（チュラロンコーン大学，モンクット王工科大学ラカバン校，カセサート大学，インドネシア大学，バンドン工科大学，ガジャマダ大学）合計80名以上の学生が関わったことになります。

Student Forum では「日本，タイ，インドネシアの英語教育のあり方」，「技術移転に必要な異文化理解」，「各国の地球温暖化対策」，「タイ，インドネシアで展開される JICA 事業」という４つのトピックごとにグループディスカッションを行い，討論の結果は最終日９月５日のジャカルタでの発表会，10月15日の帰国報告で発表され，最終報告者やオフィシャルサイトにも掲載予定です。

単なる視察・訪問に終わらず，見た事学んだ事を元に言葉・文化・専攻分野のことなる学生同士で討論をする機会は他では得られない貴重な経験となったことでしょう。カセサート大学での Student Forum の際に，タイの全国ネット TV キー局の「チャンネル３」が取材に訪れ，３か国代表の学生にインタビュアーを行い，９月29日にニュース番組内で，本学主催の国際交流活動として２分間紹介されました。



タイ Ch3での放送

去年と同様，プログラム終了後も学生同士の自発的な交流は続き，異文化理解からスタートした交流は友情へと発展し，将来日本とアジアの理工系トップクラスの大学ネットワーク作りに大きく貢献してくれることが期待されます。

最後に，昨年の JAYSES 2007 参加者の電気電子工学科卒・南野友輝氏（双日）から届いた，プログラム成功を祝う便りをご紹介し報告を終えたいと思います。

「JAYSES 2008の放送を拝見いたしました。

今年も昨年以上によいプログラムとして完遂できた様子で，喜ばしい限りです。

今年は各国から代表１名ずつのインタビューだったようですが，森島君の「21世紀においては三国だけでなくアジア太平洋地域において経済的な活動を共にすることが重要である」というコメントは全くその通りだと思います。

内需が縮小しているだけでなく，頼みの綱だった輸出先の新興国経済がリーマンショックに象徴される金融危機で鈍化する現状，そして今後数年間においては，いかに継続的な発展を共に出来るか，いかにグローバルな視野に立って意思決定できるかが重要なのではないかと思います。

その意味で，学生時代から近隣国（地理的にも経済的にも）の中における自国のありかたを考えることは，将来このような複雑な環境に対応できる人材に成長するための一助になると思います。

そういった意味では，インタビューの中でインドネシア人学生が「将来は起業したい」といっていたのはとても頼もしいです。もちろん，現在の日本は起業にやさしい環境にはないと思いますが，こういった海外の人材と知恵を出し合い，建設的に議論を重ねることで，新たな手段新たな機会にめぐりあえるかもしれませんね。」

*タイの TV 局チャンネル３での放送動画は JAYSES オフィシャルサイトで閲覧できます。
http://www.ttot.ipo.titech.ac.jp/JAYSES2008/

（国際室・国際連携コーディネーター）

JAYSESに参加して

増山　貴明

今回，JAYSESのプログラムに参加できたことで，私は多くの事を得ることができ，本当にかけがえのない経験となった。

現代の社会を見た時に，また，世界・日本の発展，一人一人の幸福を考える上で，あらゆる面で国際協力は欠かせない。特に，日本の近隣であるアジア諸国は急激な経済成長を見せており，東工大のポリシーがそうであるように，それらの国に目を向けることは当然の成り行きのことと思う。国際政治や経済だけでなく，資源の枯渇や地球温暖化，人口問題などのグローバルな問題もアジア諸国を無視して考えることはできなくなってきている。これらの国が世界に与える影響力は，とても大きなものとなっているのだ。中でもタイ・インドネシアは著しい成長を遂げつつある。途上国のようでいて，途上国でない。そのようなこの二カ国を直接見て，学べたことは，今後さらに進むであろうグローバル社会で生きる私にとって，大きな財産となったことは間違いない。

グループディスカッション

プログラム中の企業訪問では，単なる経済活動だけでなく，タイ・インドネシア両国における環境問題への対策，CSRをどのように進めていくか，技術移転の現状はどうかということを学んだ。各企業によって，各国に合った様々な工夫を行っている。また，どの企業も現地化を目指しているが，どうしても日本人が会社の中で上層部を占め，現地化しきれないでいる現状を知り，現地化を目指すアプローチを教わった。さらに，企業の海外移転の難しさの一つとして，文化・言語の違いが挙げられるが，うまくいっている企業は日本人の上層部と現地の従業員とのコミュニケーションを大切にしていた。対話相手の事を知ろうとするだけでなく，相手の家族はどうか，友人はどうかといった，その人の後ろの見えにくい部分を見るようにする努力が，明るく良い雰囲気を作っていた。そうしたコミュニケーションと共に，一人ひとりを信頼し，責任を持たせる工夫もなされていた。東工大を卒業し，エンジニアに限らずどの分野で働くにしても，海外派遣や出張，日本に居ても，外国人労働者の起用など，このようなケースにあたる可能性は大いにある。その時に“より良い会社”“より良い働き”を目指すうえで，今回学んだような，外国人との“より良い付き合い方”を心に留めておきたい。

プログラム外でも多くのことを得ることができた。街の通りを歩き，貧富の差を目の当たりにした。日本で騒がれている格差とは比べられないほどであった。その奥に隠れている悲惨な事実も知った。急成長の半面，インフラの不拡充や大気汚染も含めて，途上国の足りない部分が見えた。そういうわけか，現地の学生は日本の学生よりも政治に精通していた。技術の分野に限らず，自分の国を何とかしようと本気で考えていた。これが本当のエリートであろう，と感じた。ある学生と意見を交わしたところ，政府は発展のことばかり気にかけて，ボトムアップ，福祉を疎かにしていると言っていた。それは急成長を目指す途上国の宿命なのか，それとも政府が力不足なのかは分からないが，先に先進国の仲間入りをした周辺諸国が協力，援助，助言をしていくべきだと私は思う。一方で，その格差を感じた街並みからは無気力感など感じなかったのだ。目の力，生命力がみなぎっていた。これはどういうことか考えたりもしたが，ともかくも学ぶべきところも多かったと言える。

私が敬虔なイスラム教徒の学生と同じ部屋で泊ったときは，ちょうどイスラム教徒のラマダン（断食月）の時期であった。“朝”の3時頃に目を覚まし，朝食をすませ，お祈りをする。そこから我々日本人が起きる“朝”までレポートや勉強をしていたようだ。彼からラマダンの意義や，イスラムの文化につ

いて教えてもらい，他にも多岐にわたった対話をすることができた。こういった対話のおかげで，普段あまり関わりのなかった異文化の人に対する，今まで持っていた勝手なイメージや固定観念が払拭することができ，理解，信頼，尊敬をすることができた。

様々な違いを乗り越えて，理解，信頼，尊敬を勝ち取っていく，これがいかに重要なことか。世界中でこのような交遊関係の輪ができ広がっていけば，無価値な争いなどなくなり，協力関係へと変えていけるのに，と思う。

バンドン工科大学での発表

今回見たのは一部だけである。東京の一部，例えば丸の内を見ただけで，日本を計るのが愚かなように，今回も見た一部の情報，出会った一部の人だけでタイやインドネシアの国を計るのはおかしい。特にインドネシアに関して言えば，1000を超える島からなる多様性の国であるからなおさらである。しかし，それでも世界に目を向ける良いきっかけになった。今まで常識と思っていたことが常識ではなかったということがわかり，自分の視野の狭さに反省した。今まで世界に目を向けているようで，全然わかっていない自分がいたのだ。

冒頭に述べたとおり，今回の渡航は本当にかけがえのない経験となった。自分の将来への糧となったし，また，周囲の人に私が得たことを伝えていきたいと思った。参加することができて，本当に感謝の想いでいっぱいである。企画，応援してくださった方々に心から感謝したい。

（工学部開発システム工学科　2年）

TECP'08　インド旅行記

副島　佑介*，芳賀　浩太*，
永瀬　知昭*，片岡　紗希**，
米内　正明***

1．はじめに

普段の「一か月」のスピードとは一体どのくらいなのだろか？言い表すのは難しいが，少なくとも私たちがインドで体験した「一か月」は，日本でのそれと長さは同じだとしても，随分と凝縮されたものであって，濃度・温度・彩度が高く，帰国時には一か月前からワープしてきたかのような感覚であった。

2008年の8月6日から9月4日の約一か月，私たち5人は，インドへのインターンシップに参加してきた。通称 TCEP（Training and Cultural Exchange Program in India）である。TCEP は情報理工学研究科の授業の一つで，インドの IT 企業のもと，研修トレーニングを受け，また共に文化交流を行うというものである。

今回，インド南部の大都市チェンナイにある IT 企業，Covansys 社に大変お世話になった。平日の研修，休日の観光など，全てにわたり取り計らっていただき，安全に一か月を過ごすことが出来た。本稿ではその一か月の輝かしい体験を，一人一人それぞれに描いてみたいと思う。

2．子供との触れ合い・教育

私たちが滞在していた会社のゲストハウスの周りは普通の住宅街であった。なので，夕方になるとたくさんの子供たちが学校を終えて集まり，クリケットなどをして外で元気に遊んでいる。もちろん一緒に混ぜてもらう。毎日研修から帰ってきては，夕食時まで汗をかき，体中蚊に食われながらも外を駆け回っていた。小学生の放課後のあの気分だ。何年ぶりの感覚だったろうか。彼らとのこうした何気なかった毎日が今とても懐かしく恋しく思う。

子供たちとは様々な会話をして笑いあったが，最も印象的だったのは，みんな英語が使えることであった。聞くところによると，それなりの学校に通えている子達は，小学校低学年の頃から5教科（母国語（ここではタミル語），英語，数学，科学，地理）のテストが頻繁にあり，その都度テスト勉強をたくさんしていた。遊んでいる途中で早く帰る子供のそ